
《論 文》

脅迫観念に囚われた自我の行方 —— J. C. オーツの作品,
In the Region of Ice と *Where Are You Going,*
Where Have You Been? から —

川 瀬 裕 子

はじめに

この小論においては、ジョイス・キャロル・オーツの二つの短編作品を取り上げ、それぞれの女主人公の内奥の心理が外界にどのように対応していくかを検討する。社会的境遇の如何にかかわらず、人物たちが狂気や暴力の犠牲となるのだが、彼女たちの内心の核となる心理が必然的に悲劇を導くことになるのか、あるいは、外界の不条理さが原因で悲劇が起きるのかを考察していくが、危機に瀕した人物たちが狂気や暴力の犠牲になることは、われわれに何を示唆しているのかを考えていきたいと思う。オーツは、人物たちが極限の心理状態におかれた場合、心理の奥底にある感情が、外界との関係においてどのような歪みとなって現れるかを問題視していると思われる。このことについては、アルフレッド・ケイジンが、社会の趨勢と人物と関係を重視したオーツに注目して、次の様に述べている。”Joyce Carol Oates seemed, more than most women writers, entirely open to *social* turmoil, to the frighteningly undirected and misapplied force of the American powerhouse.”¹⁾ この点が、まさに、オーツが社会派の小説家と呼ばれている点なのであるが、アメリカ文化を作り出したエネルギーの何が、今、問題なのか、どのようにその問題が現われているのか、この作家によって選ばれた人物の現実と非現実の認識のくいちがいを明らかにすることによって、人物と社会との関係が見えてくれば幸いである。

この小論の扱う人物は、一人は、カトリックの若い尼僧で、彼女の閉ざされた心理を描いた作品 *In the Region of Ice* から彼女の人格像を探っていくことにする。また、ロマンスを追い求める十代の少女が陥る自己喪失の行方を *Where Are You Going, Where Have You Been?* に追及し、この二作品の人物たちの精神構造を関係づけて考えていきたいと思う。これらの作品は、1970年に出版された *The Wheel of Love* に収められた短編で、グレグ・ジョンソンが述べる“the emptiness and sterility of a life from which romance has fled”²⁾ という説が示唆的であることから、自己中心的な、空虚で不毛な精神の落とし穴に落ちた二人の主人公の対極の反応——固く心を閉ざしてしまうシスター・アイリーンと壊滅的打撃を受けるのコニーの運命

——の方向性を比較検討していきたいと思うのである。ここに描かれる二人の女性の個別の経験から、不条理な結末に至った主人公たちが、現実と非現実の境界がぼやけるところに囚われていく心の動きを明らかにし、オーツの短編小説の力量を堪能したい。

1

オーツの評伝を著わしたエレン・フリードマンは、次の引用において、アメリカ社会という巨大な枠組の中にいる人間を「社会と人間」の関係でとらえたオーツが、人物の心理を個別に分析しながら独特にアメリカ的問題の特徴を抑えている点を重視して次のように述べている。“In Oates’s fiction, the individual is always viewed in the perspective of the large world—most often, in the perspective of culture and history. Oates is an American writer self-consciously exploring the American experience.”³⁾ *In the Region of Ice*におけるシスター・アイリーンを描くときのオーツは、シスターをカトリック社会の、イエズス会の大学という設定の中において、その独特の社会の中で一人の尼僧がどういう位置づけであるかという配慮を忘れてはいない。限られた条件を認め、与えられた教職につくひとりの尼僧の描写は次のようになっている。“This was a new university and an entirely new world. She had heard—of course it was true—that the Jesuit administration of this school had hired her at the last moment to save money and to head off the appointment of a man of dubious religious commitment.”⁴⁾ このような状況下で、シスターは、厳しい研究者としての雰囲気と漂わせた若い教師として登場する。彼女の独特の風貌には堅固な思想に固まった、人を寄せつけない存在感があることを、作品の冒頭の一節から読み取ることができる。“Sister Irene was a tall, deft woman in her early thirties. What one could see of her face made a striking impression—serious, hard gray eyes, a long slender nose, a face waxen with thought. Seen at the right time, from the right angle, she was almost handsome.”⁵⁾ という存在感を印象づける。新任の教師として、シスターの講義に厳しく、達成感を確認しないではいられない職務姿勢には、大学制度の権威の埒外におかれた者が、唯一、自己の存在を確認する場を教室に求めていることが理解される。大学内の政治機構から除外されているシスターは、彼女の外界との間に差別という強固な壁が立ちはだかっていることに気付くのである。カトリックという社会の階層の中で、“She became, once and for all, a figure existing only for the benefit of others, an instrument by which facts were communicated.”⁶⁾ と、要求されている職務を遂行することが大学に対するキリスト者としての献身の精神であると期待されているのである。

*Where Are You Going, Where Have You Been?*におけるコニーは、15歳の少女である。彼女の前には、家庭と学校が窮屈に立ちはだかり、うるさい母親は、常に姉を引き合いに出し、コニーの言動を批判する。父親はサラリーマンであるが、家庭内のことには関心を示さない。家庭での父の存在は希薄である。コニーは、窮屈な家庭環境の中で彼女独自の夢想の世界に浸

ることで、退屈な日常生活に反抗し、密かな満足感に浸っている。彼女の世の中に対する挑発は、鏡の中や、他人の顔の中に彼女自身の容姿を確認し、存在を誇示し、“...and she had a quick, nervous giggling habit of craning her neck to glance into mirrors or checking other people’s faces to make sure her own was all right.”⁷⁾ と、鏡に映る自分の姿に対する自己陶醉と神経症的な愚笑いの態度には、母や姉をも含めた女たちへの優越意識を現わしているのである。

オーツが描くカトリックの若い尼僧と若いアメリカの大衆文化の旗頭の十代の少女はアメリカ文化地図上にある聖と俗の世界の対照的人物であることは興味深いところである。また、オーツが、固定概念で受けとめられやすいユダヤ人やカトリック教徒の関係を前面に押し出し、また、時代を特徴づける若者の生態を直視するからには、そこに、アメリカの精神風土の荒廃を認めた、作家に何が出来るかという黙示的使命の自負があるように思われるのである。

シスター・アイリーンの前に現われた一人のユダヤ系の学生アレンについてであるが、最初は、シスターの寛大な対応が印象づけられる。授業は活気づき、教室でのアレンとの問答には知的刺激があった。彼は、シスターを質問攻めにし、独自の見解を強制し、傲慢で尊大な態度をとるかと思えば、また、人なつこく親しげに振る舞う。シスターはそうした彼の感情の起伏の激しさに翻弄されそうになりながらも、心が動かされていくのである。“It was absurd, and yet—she spent too much time thinking about him, as if he were somehow a kind of crystallization of her own loneliness.”⁸⁾ 千変万化のアレンの感情の起伏を見ていると、シスターには、彼女の孤独な心模様を、アレンが身代わりになって演じて見せてくれるように思われるのである。このことは、シスターが、このときすでに、精神の世界でアレンの世界に同化していることを暗示している。この学生が突然現われなくなり、精神病院に送られたということが知らされてから、シスターの精神生活の動揺が著しくなっていく。

一方、15歳の少女コニーの場合はどうであろうか。彼女が遊び仲間とショッピングセンターへ夜遊びに出かける慣行は、デートの相手を求めるためである。若者たちにとって郊外のショッピングセンターは、互いに、商品を品定めするように相手を選ぶ格好の売り場のようなものである。コニーは気に入った男の子からの誘いがあるといつでも応じるのであるが、そういうときの彼女は、その夜のデートの相手に対するよりも、誘いを受けたときの彼女自身について狂喜するのである。彼女自身の容姿を商品化し、そのうぬぼれと自己陶醉の様子は、まるで、晴れの舞台に立ち、一身に観客の視線を浴びていることを意識する女優の晴れ姿に似た幻想を連想させる情景である。“So they went out to his car, and on the way Connie couldn’t help but let her eyes wander over the windshields faces all around her, her face gleaming with a joy that had nothing to do with Eddie or even this place;”⁹⁾ そういうコニーを、一人の男の執拗な目が追っている。“It was a boy with shaggy black hair, in a convertible jalopy painted gold. He stared at her and then his lips widened into a grin. Connie slit her eyes at him and turned

away, but she couldn't help glancing back and there he was, still watching her. He wagged a finger and laughed and said, 'Gonna get you, baby.'¹⁰⁾ コニーを狙う男, アーノルド・フレンドが「君は、ぼくのものだぜ」という言葉はコニーには届かず、彼女は、あくまでも、無邪気に夢想到に耽っている。アーノルドの登場は、やがて、彼女の運命を非現実の空想から現実の世界へ導いていくことになるのである。

この二つの作品の背景を考えると、シスター・アイリーンとアレンの出会いの場面が小さな大学の構内ということ、コニーが最初にアーノルドに出会ったのが郊外のショッピングセンターであるという設定は、対照的な場面設定として興味深い。アメリカ社会の中でカトリック教の修道院社会という特殊な社会と典型的な若者文化の中から共通する問題を見つめようとしているオーツの意図的な場面選択であるにちがいないのだ。こうした空間での出来事が人間関係、特に、恋愛に関わることである場合に、状況が主人公の限界を条件づけることになるのか注意していかなければならない。シスターが、アレンの苦悩にたいして理解者とならず、彼の死にたいしても冷淡でいられることは、尼僧の使命感と人生を選択の問題の両方についても彼女の生き方の問題が見えてくると同時に、彼女が、文学を講じ、シェイクスピアを専門とするということも考慮に入れて、シスターの冷たく閉ざされた精神の行きづまりを修道院という閉ざされた空間に求めて、オーツは、痛烈な皮肉の視点で描いていく。コニーについては、アメリカ社会では、きわめて平均的な十代の女学生であるに違いないのだが、オーツがコニーを追求するのは、彼女の自己中心の夢想到が現実感覚を見失うことになるという切実な問題を投げかけて、現実と非現実の境界が見えなくなる問題について、コニーの精神を壊滅させることで衝撃的決着をつけるのである。このような二人の主人公が現実と非現実の間の「すきま」や「ずれ」を見落としていることから生じる問題を以下で、さらに、検討する。

2

作品 *In the Region of Ice* の主人公のシスター・アイリーンは、中西部にあるカトリック系の大学で文学を講じるようになったが、彼女の職務に対する意欲が過小評価されていることに気付くのである。イエズス会の大学の権威機構は、極めて男性中心の社会であり、シスターの役割は型通りの授業を遂行すること以外に期待されてはいなかったのである。彼女の自己実現に将来性はなかったが、彼女は、それでも、この状況を聖職者の試練と受け止めることにしたのである。“She had no trouble with teaching itself; once she stood before a classroom she felt herself capable of anything. It was the world immediately outside the classroom that confused and alarmed her, though she let none of this show—the cynicism of her colleagues, the indifference of many of the students, and above all, the looks she got that told her nothing much would be expected of her because she was a nun. This took energy, strength. At times she had the idea that she was on trial and that the excuses she made to herself about her discomfort

were only the common excuses made by guilty people”¹¹⁾ この引用から理解できるように、シスターもときには、愚痴を言いたいのである。しかし、彼女は、罪深い人間たちが口実にするようなことをするまいと決意を固めると、彼女に対して向けられる同僚の冷笑や学生の無関心にも耐えられるのであった。シスターが教師として評価されるのは、研究者としての研鑽の成果ではなく、知識を適切に伝達できる教師の一人として見なされることであった。

アレン・ウエインSTEINというユダヤ系の学生の出現は、シスターに教師としての達成感を触発するものであり、この学生の挑むような反論、個性的な意見は、シスターの生活を刺激した。しかし、この学生の知的反論には、危険な論理の展開が目立ち始めた。周囲との不釣り合い、奇行が問題となっていくのである。彼は、教室では、全く、孤立していた。シスターは、彼女自身の孤独をアレンの孤立状態に二重写しにするようになり、彼に対して同情心を抱くようになる。アレンが授業に出席しないと気になり、黙想の最中にも彼のことを考えることが多くなっていく。

一方、*Where Are You Going, ...?*の主人公コニーの場合であるが、彼女と遊び仲間たちは、身なりや持ち物で仲間意識を確認しあい、ショッピングセンターでは、人目につくように振る舞うのである。“They must have been familiar sights, walking around the shopping plaza in their shorts and flat ballerina slippers that always scuffed the sidewalk, with charm bracelets jingling on their thin wrists; they would lean together to whisper and laugh secretly if someone passed who amused or interested them”¹²⁾ この場面に描かれている十代の少女たちの風俗や行動の習性は、刺激を求めて徘徊し、何か出来事が起きることを期待している情景になっている。とりわけ、コニーは、彼女の容姿が他の少女たちを凌駕しているという幻想を抱いているのである。彼女は、母親に対しても密かな優越感を覚えているのである。彼女には、若さという武器があったからである。“Her mother, who noticed everything and knew everything and who hadn't much reason any longer to look at her own face, always scolded Connie about it. ‘Stop gawking at yourself. Who are you? You think you're so pretty? she would say. Connie would raise her eyebrows at these familiar old complaints and looking right through her mother, into a shadowy vision of herself as she was right at that moment: she knew she was pretty and that was everything. Her mother had been pretty once too, if you could believe those old snapshots in the album, but now her looks were gone and that was why she was always after Connie.”¹³⁾ コニーが母親を見る目も、自分は若い、母は年をとっている。だから、自分の方が勝っているのだという単純な見方なのである。母親はもはや、鏡を見る必要もないのだ。もう、若いのだからというコニーの思いには、未来についての考えがない。彼女は、今、この瞬間の自分にしか関心がないのである。自分の美貌が評価されるときだけ彼女は生きていることを実感できたのである。異性に求められる自分の姿を想像するために、刹那の自己陶醉の感覚を引き

出す導き手として相手が現われてくれさえすればよかったのである。コニーが空想の中に現実感覚を実感するという自己中心の空想と現実のすり替えの精神構造は、アーノルドの犯罪的行為を刺激する要因になっているのである。

次の章では、シスターとアレン、コニーとアーノルドの具体的な交流のなかから、彼女たちの心理のメカニズムを分析する。

3

シスター・アイリーンとコニーは、彼女たちの思惑が外界からの刺激を受けて、ずれが生じたことで運命を変えていく。シスターは、自分の感情を失うまいと徹底して保身を貫き、コニーは、彼女の思惑はずれから自己崩壊という結果を招いていくのであるが、この二人の思惑の過誤が招いた感情の動きと顛末を以下で追っていくことにする。

まず、シスターとアレンの場合であるが、シスターは、あるとき、アレンの唐突な発言に、これまでの彼女の優位な立場の土台が崩れる。アレンは、“The students in your class are mainly negligible. I can tell you that. You’re new here,”¹⁴⁾と手厳しい感想を投げかけた。シスターの誇りは多少の傷を受けながらも、彼女は、アレンを大目に見ていく。彼は、教室でも、平然と、尊大な態度で他の学生を圧倒している。シスターは、この学生が巻き起こす些細な軋轢の中から彼の問題を探ろうとしていく。“...he sat in the center of the class, he seemed totally alone, encased by a miniature of his own.”¹⁵⁾アレンは、孤立を誇示し、他の学生たちを寄せつけなかった。しかし、学生たちにとっても、彼は嘲笑の対象となっていたのである。アレンの多弁と攻撃的発言には、彼の頭脳の明晰さと不均り合いな危険性があった。“...there was something rude and dismal about his knowledge; he used it like a weapon,”¹⁶⁾このように、アレンの発言は、しばしば、講義の妨げとなり、彼の言葉は凶器のように恐怖を起こさせるものがあった。アレンのせいで議論を中断することもあるのである。シスターは、アレンの狂気を危険視して、彼を精神的に導くことが教師の使命であると考えようようになっていく。ところが、アレンの考え方は根本的なところでシスターの現実認識とは異なっていた。‘ideas are real’¹⁷⁾という彼独自の観念論をもっていたのである。シスターは、‘only reality is real’¹⁸⁾と心得ているつもりであった。ここでの二人の考えの相違が、後に逆転して、アレンの自殺による彼の観念論の終結が、シスターの現実認識の過誤を露呈していき、彼女の‘reality is real’という現実的考えが、彼女の選択した尼僧としての人生を不安定にしていく。この事件の終結にあたって、シスターは、尼僧生活の厳しい規則の中に埋没し、アレンについて考え、苦しむことを拒絶していくのである。

かつて、シスターは両親の過多の愛情表現を、否定的に捉えていたことがあった。“They had been whining weak people, and out of their wet need for affection, the girl she had been (her name was Yvonne) had emerged stronger than either of them, contemptuous of tears because she

had seen so many.”¹⁹⁾ 彼女が、両親を観察して学んだこと、それは、弱い人間が愛情を求めるといふ固定した観念であったのである。彼女は、涙もろさを軽蔑し、強靱な人格を討ちたてることが、彼女の人生の主選択となった。彼女の両親の愛情表現を嫌悪し、否定することが、強固という意味だったのである。表面上貫く神への奉仕の人生の陰には、愛情に優劣をつけるという構造が、彼女の体験の中から培われてきたのであった。彼女の硬質な性格は、聖職と研究を突き進む強靱な支えとなったことは認められるが、迷いを見せない性格のシスターが強烈なアレンの狂気と情熱に直面して、“She felt her customary rigidity as a teacher begin to falter.”²⁰⁾ と、強固な守りを崩していくのである。しかし、崩れかけた自我を立て直すために、彼女がつかう論理的手段は、同情を抱くという態度を武器として使うことであった。この同情心には、彼女が、優位な立場であることを説明できる余裕が残されていたのである。後になって、彼女は、この同情心が問題であったことに気付くのであるが、アレンに心を動かされたという事実については、同情心さえ回復できれば、立ち直れる問題として考えていくのである。

ところで、シスターの動揺はアレンには、無関係であった。アレンは、シスターに心を傾けているわけではなかった。彼は、シスターの抑圧された精神にゆさぶりをかけたという意味で、彼女にきっかけを与えたに過ぎない。彼女がアレンに騙されたと感じることについても、アレンは、彼女に何の約束もしていないのであるから、彼女は勝手な思惑の筋立てをし、足掻くのである。“If she had been deceived by him, she made herself think angrily, it was as a teacher and not as a woman. He had promised her nothing.”²¹⁾ この場面では、シスターがアレンに欺かれるかも知れないことを憶測して、もし、そうなった場合には、女として痛手を受けるのではなく、あくまでも、教師としてであると、わざわざ、口実を思案するのも、彼女が、できるだけ痛手を受けないようにするための保身の姿勢なのである。アレンが小論文の提出を遅れた言い訳を述べる場面で、この二人の立場が逆転するのである。本来、遅れた提出物は受理しない規則になっていたのであるが、アレンは、しつこく哀願して、シスターに受け取らせ、彼女の反応を試すような態度に出るのである。“He raised his eyebrows and smiled a sad, forlorn, yet irritatingly conspiratorial smile”²²⁾ というアレンの表情には、規則違反をすることについては、シスターを同罪者と目論む共謀者の視線が動くのである。シスターにとっては、アレンの性格上の問題については、教師として対応できるという過信があった。ところが、アレンには、したたかな脅迫者の様相があったのである。‘a terrified prisoner behind the confident voice’²³⁾ という犯罪意識の二面性、つまり、「怯えた顔」と「過信した態度」を使い分けである。シスターに論文を受理させたことは、アレンの勝利感を強めた。ここからは、アレンの独壇場となる。彼の得意の観念論は、ユダヤ民族の迫害の歴史や偉業を強調し続けるのであった。さらに、‘...only the Jew is authorized to understand humanism’²⁴⁾ という大胆な発言をするのである。彼は、シスターが‘humanist’であるかどうかを試そうとしていた。彼の解釈によると、“So, I say that the humanist is committed to life in its totality and not just to his profession! What

else? I recognize in you a humanist and a religious person...”²⁵⁾ という見解になるのであり、ここで、‘profession’という言葉をあえて持ち出すのは、シスターの聖職者の生き方を意識しているからである。このとき、アレンは、シスターに対して、キリスト教を代表させて、ユダヤ民族に対立させているのである。アレンの不穏当な演説口調が続くが、シスターには、アレンが理解できているわけではなかった。しかし、彼女が、アレンに同情心を抱いた結果、彼をここまで傲慢にしてしまったことは認めないわけにはいかなくなるのである。“It became clear to her at once that Weinstein was the most intelligent student in the class. Until he had enrolled, she had not understood what was lacking, a mind that could appreciate her own.”²⁶⁾ シスターは、初めて、自分の弱さに気づき始める。彼女は誰かに認めてもらいたかったのであった。学生の中で最も優秀であると思われた青年から教師として評価されることは、確かに心地よかった。ここに、彼女の過誤があったのである。アレンの論文のテーマが‘*Erotic Melodies in Romeo and Juliet*’というのも、シスターの心理に作用するが、それにも増して、彼女が恐れたことは、アレンの親しげな接近や提出された論文に、彼の思いが託されていると思ひ込んだ彼女自身を認めたことなのである。“She was terrified at what he was trying to do—he was trying to force her into a human relationship.”²⁷⁾ ここで、シスターは、‘a human relationship’を恋愛関係と思ひ込み、アレンが関係を迫ってくるという脅迫観念を抱くようになっていくのである。彼女は、‘rigidity’の仮面をつけた教師の顔に戻ることによって、その仮面の背後に感情を隠すのである。

さて、*Where Are You Going, Where Have You Been?* におけるコニーにとっては、アーノルドの出現が、彼女の夢想からの目覚めを促すという意味では、現実を直視することを促す教訓にはなっている。しかし、コニーの覚醒が、おとぎ噺の王子ではなく、醜悪な、誘惑者によって導かれ、彼女の運命が壊滅的打撃を受けるという結果になるのである。コニーとアーノルドの会話のやりとりによって事件が展開し、アーノルドの心理作戦にコニーが乗じていく過程は恐怖の体験であり、それが読者の感情の領域まで入り込んでくるのである。

事件の当日は、暖かい日曜日である。午後のひだまりで、コニーは、前日の彼女の遊びの余韻をむさぼり、幸せなまどろみの最中であつた。“Connie sat with her eyes closed in the sun, dreaming and dazed with the warmth about her as if this were a kind of love, caresses of love, and her mind slipped over onto thoughts of the boy she had been with the night before and how nice he had been, how sweet it always was,”²⁸⁾ そこへ、突然見知らぬ男が出現するのである。彼女の夢想は破られるが、再び、この男の導きで夢の続きが見られるかもしれないという甘い期待を抱くのである。この男の発したあまりにも親しげな一言、“I ain't late, am I?”²⁹⁾ は、コニーの対応に戸惑いを覚えさせた。彼女は、誰とも約束をしていないのである。彼女の反応は、“She couldn't decide if she liked him or if he was just a jerk, and so she dawdled

in the doorway and wouldn't come down or go back inside.”³⁰⁾ と、いつもの品定め時間を弄び始めるのである。まず、最初は、関心のない素振りで、“She spoke sullenly, careful to show no interest or pleasure, ...”³¹⁾ と、はねつけるような態度を示す。しかし、自分がこの男の目にどう映っているかは、周到に注意を払うのである。アーノルド・フレンドは自己紹介したが、サングラスをしたままであり、人相は把握できない。“He slid out just as carefully, planting his feet firmly on the ground, the tiny metallic world in his glasses slowing down like gelatine hardening, and in the midst of it Connie's bright green blouse.”³²⁾ このとき、アーノルドがかけているサングラスは、コニーがアーノルドの実態を見ようとするときの障害になっているのだが、彼女が、現実を把握できないまま、アーノルドのサングラスに映っている彼女の小さな姿に彼女の運命を消滅させていくイメージの暗示がある。

アーノルドは彼女についての情報をしっかり押さえていた。家族や友人、その日コニーが一人で留守番をしていることまで知ってやってきたのである。コニーは、アーノルドに年齢を聞いたところ、“That's a crazy thing to ask. Can'tch see I'm your own age?”³³⁾ と彼が答えるのだが、同世代の若者ならば、そのようなことを言うはずがないのではないかと、やっと、コニーに不審の気持ちが起こってきた。“He grinned to reassure her and lines appeared at the corner of his mouth. His teeth were big and white. He grinned so broadly his eyes became slits and she saw how thick the lashes were, thick and black as if painted with a black tarlike material.”³⁴⁾ アーノルドは若者ではなかった。容貌もコニーの関心を引かない。連れの男もあやしげである。コニーは、やっと、身を守る必要を察知した。“Connie felt a wave of dizziness rise in her at this sight and she stared at him as if waiting for something to change the shock of the moment, make it all right again.”³⁵⁾ このときの‘wave of dizziness’はコニーの精神を幾分麻痺させた。次のような無益な言葉が彼女から発せられる。“‘Maybe you two better go away,’ Connie said faintly.”³⁶⁾ これまで、彼女の夢想は、悉く、甘美であった。夢想には、悪夢もあるのだとぼんやりと感じた瞬間、コニーは、恐怖で金縛り状態になる。“Connie stared at him, another wave of dizziness and fear rising in her so that for a moment he wasn't even in focus but was just a blur standing there against his gold car, and she had the idea that he had driven up the driveway all right but had come from nowhere before that and belonged nowhere and that everything about him and even about the music that was so familiar to her was only half real.”³⁷⁾ コニーは、アーノルドが闖入者であり、彼女を誘惑しようとしているのだということがおぼろげに感じられるのであるが、彼女の精神も身体もアーノルドの意のままになっていくのである。電話に延ばした手は、アーノルドの一言で引っ込み、彼に、立って歩けと言われれば、そのとおりにするのである。アーノルドは、網戸越しではあるが、コニーの精神を恐怖で呪縛し、このために、コニーの五感が捉える現象は、現実と非現実の交錯となって顕れるのである。アーノルドの車のラジオの番組は、コニーの家の中から聞こえてくる番組と同じである

ことは、かえって、コニーの惑乱を強化した。アーノルドは、甘美な夢想の世界の仮面をつけて、コニーを悪夢の世界に導き入れようとしているのである。“She watched this smile come, awkward as if he were smiling from inside a mask. His whole face was a mask, she thought wildly, tanned down to his throat but then running out as if he had plastered make-up on his face but had forgotten about his throat.”³⁸⁾ コニーがアーノルドの顔を仮面であると受け止めるのも、仮面が笑っていると捉えるのも、仮面の背後にある実像を見極める能力が、もはや、コニーは喪失してしまっているからである。コニーは、半ば、虚ろな意識の底から、アーノルドの甘美な誘惑の言葉に反応し、家を出るのである。

このように、二人の主人公は、それぞれに、外界からの強制によって、彼女たちの内面の核をえぐられる経験をする。シスターの硬直した自我は、外圧を拒絶する力があったが、まさに、その拒絶する力のために感情を育むことを拒んでしまうのである。また、思春期の少女コニーにおいては、彼女の幻想の中にのみ真実を見ようとした過誤が招いた悲劇の運命が待ち受けるのである。

4

ここでは、グレグ・ジョンソンが‘emptiness’や‘sterility’を問題として取り上げた意味を改めて考察してみたいと思うのであるが、ジョンソンに従えば、オーツが描く「ロマンスが去ってしまった」アメリカ人の姿には、かつての無垢で肯定的な自然観からかけ離れてしまった世界で混迷する人物たちであるようだ。彼等がどこかに置忘れてしまった、あるいは、欠落させているものを直視して、オーツが‘emptiness’、‘sterility’の現象をとらえたときに、この作家の描く人物たちにとっては、都市空間という、聖濁入り交じる状況が格好の「場」となっていることは見逃せない点である。これに関して、オーツ自身は、次のように述べている。“In America, emphasis has generally been upon the City as an expression of the marketplace struggle that will yield—*should* yield, this being the New World—individual success in financial and social terms: Utopia may not really exist, but the Utopian dream of salvation is still potent.”³⁹⁾ このように、オーツの目に映る「無垢なるもの」や「聖なるもの」「俗なるもの」を抱え込んだ都市文化は、その多様な文化の中から、ユダヤ人の青年を選び、アーノルドのような誘惑者を出し、都会の中にある修道院も、そこに暮らす尼僧も、商品市場のような恋愛遊戯を楽しむ若者も、アメリカ的文化が抱え込んだ情景として捉えられていくのである。そうであるから、ユダヤ青年に恋をしたシスターの心の動揺、また、危なげな十代の少女の幻想についても、われわれの想像力に確かな手がかりを与えてくれるのは、彼女たちが、アメリカ社会の群像の中の個人として強烈に写実性があるからにほかならないのである。

シスター・アイリーンが、彼女の住む世界が偽りの社会であるかもしれないという虚妄を抱き、とまどいをみせるのも、都会という聖と俗の混濁した社会に棲息する者の悩みであると理

解することができる。“Life at the convent became tinged with unreality, a misty distortion that took its tone from the glowering skies of the city at night, identical smokestacks ranged against the clouds and giving to the sky the excrement of the polluted and successful earth.”⁴⁰⁾ この場面において、シスターが街の明りや林立する煙突の煙を見ては、世俗の生活者たちの排泄物が天に向かって吐き出されていると感じるのだが、それまでは世俗を離脱した者が地上の生活を汚濁した世界であると遠くから眺める視点があった。ところが、シスターがこれまで思い込んでいた聖域が非現実の世界で、現実からはじき出された歪んだ世界ではないのかと自問することになったとき、尼僧生活が無意味なものに感じたのである。彼女は、修道院への帰属意識が崩れかけていくのである。“The little convent was not like an island in the center of this noisy world, but rather a kind of hole or crevice the world did not bother with, something of no interest. The convent’s rhythm of life had nothing to do with the world’s rhythm, it did not violate or alarm it in any way.”⁴¹⁾ シスターが地上の裂け目としてとらえた修道院のイメージは、この聖域が、もはや、彼女にとっては、魂の救済の場ではなく、逆に、底知れない、暗い闇に陥落する否定的なイメージを与える場になってくるのである。シスターは、散在する気持ちの断片をつなぎ合わせようと焦るのであるが、恋する尼僧、恋する女、学生に恋する教師、その相手はユダヤ人という具合に、彼女は、複雑に矛盾しあう立場の断片や役割の何処に自分が関係づくべきであるのかを考えると恐怖にとらわれるのである。しかし、彼女はこれまでの人生で、初めて、“...a magnificent and terrifying wonder”⁴²⁾ を経験することができたのである。恐怖であると同時に、神秘でもある矛盾する感情がぶつかりあう経験の重さをシスターがどのように受け止めることができるかが、この物語の核心となっていくのである。

さて、われわれがコニーという少女に注目するとき、彼女が現代のアメリカ社会では、きわめて、平均的な若者で、オーツがすでに述べた恋の‘marketplace’を提供する都会という設定の産物であることは考慮に入れてよい。消費社会が生んだ男女関係の原型がティーンエイジャーたちの恋の取り引きにも現われ、コニーの恋についての妄想と大胆な行為は自分の商品価値を高めるために練り上げた周到な作戦になっているのである。

She wore a pull-over jersey blouse that looked one way when she was at home and another way when she was away from home. Everything about her had two sides to it, one for home and one for anywhere that was not home: her walk, which could be childlike and bobbing, or languid enough to make anyone think she was hearing music in her head; her mouth, which was pale and smirking most of the time, but bright and pink on these evenings out; her laugh, which was cynical and drawling at home —“Ha, ha, very funny,”

— but highpitched and nervous anywhere else, like the jingling of the charms
on her bracelet.⁴³⁾

コニーは無邪気な子供ではなく、二つの顔をしたたかに使い分けているのである。都合よく、あるときは子供っぽく振る舞ったり、また、夜に出かけるときには、大人の女の振りをするのである。彼女は自分の容姿や振舞いの使い分けの中に、自分を演出し、彼女の二つの顔が他人に与える影響を観察しているのである。他人が自分に注目してくれることに価値をおくために、彼女の神経症的な高笑いや、ブレスレットの金属音をたてて示威行為に及ぶのも、すでに述べたように、コニーの様な少女が物質的なものに価値基準をおいているからであるということ、‘a life from which romance has fled’というジョンソンの指摘の中に捉えることは可能である。コニーのロマンスが、自分の容姿の商品価値を高めて、市場にだすこと以上のことではなく、彼女は、家庭では、誰も彼女に注目してくれないために、欲求不満を撒き散らしているが、‘marketplace’においては、男の子たちの視線を意識することができたのである。アーノルド・フレンドもその内の一人であったのである。コニーが男たちに見られることを意識していたことは、アーノルドにも同等の権利を認めていたことであるから、彼が、コニーに接近してきたとしても当然のことなのである。ロマンスを待ち受けるコニーが、ロマンスという仮面の下にある犯罪行為の犠牲になる運命については、彼女の自己中心的な夢がアーノルドの出現を待つことになったという皮肉な結果となった。

シスター・アイリーンにとっては、アレンとの交流の意味を追求することよりも人生の選択という問題が重要であった。シスターのこの結論までの過程は複雑に矛盾する心の対立があったことはすでに述べたとおりである。しかし、彼女の迷いには、“She saturated herself daily in the knowledge that she was involved in the mystery of Christianity.”⁴⁴⁾というキリスト教の秘蹟に身を委ねたはずの思惑に狂いが生じたことが問題となったのである。予期せぬ形で恋愛感情にとりつかれた彼女の霊的生活の危機は、恋をしてはいけない相手を好きになった危機意識ではなく、アレンに対する思いから、シスターがキリスト者としてあるべき生き方を強いられるという脅迫観念であったのだ。彼女は、この不用意の出来事に恐怖を覚えたのである。“A daily terror attended this knowledge, however, for she sensed herself being drawn by that student, that Jewish boy, into a relationship she was not ready for. She wanted to cry out in fear that she was being forced into the role of a Christian,”⁴⁵⁾ 異端の青年に恋をしたシスターが、‘the role of a Christian’ということ強制される思惑にいたるまでの論理の曲折については、彼女が教会に献身的であったこと、謙虚に職務を果たしてきたこととは無関係で、キリスト教徒としての義務とは別の問題であったのだ。アレンが入ってきたシスターの精神は、修道と異端の青年への思慕の衝突の間を行き交う内に人生について懐疑的になっていった。このことは、

アレンには直接関係のない、彼女自身の問題であった。シスターが抱く‘a thing of terror’⁴⁶⁾の感情は‘a magnificent and terrifying wonder’にまで高められていくかに見えるが、矛盾する感情によって、彼女自身を失ってしまうほどの不安と、神秘的体験の重圧によって苦しむのであった。シスターがこの思考の矛盾と苦痛から解放されるのは、アレンの死によってであった。彼の死の知らせに動揺もしないシスターには、良心の呵責、罪の意識はなく、平然として彼女の人生の選択の問題であるとして突き放して終わるこの物語には、このシスターの宗教体験そのものに対するオーツの痛烈な皮肉が込められているように思われるのである。

She could only be one person in her lifetime. That was the ugly truth, she thought, that she could not really regret Weinstein’s suffering and death; she had only one life and had already given it to someone else. He had come too late to her. Fifteen years ago, perhaps, but not now.

She was only one person, she thought, walking down the corridor in a dream. Was she safe in this single person, or was she trapped? She had only one identity. She could make only one choice. What she had done or hadn’t done was the result of that choice, and how was she guilty? If she could have felt guilt, she thought, she might at least have been able to feel something.⁴⁷⁾

シスターの霊的生活の危機はキリスト者としての使命からというよりは、アレンとの交流をとおして彼女が「聖的なもの」と考えていたことが、恋愛感情と二重構造になったとき、「俗なるもの」の面がむき出しになったという問題に直面したからであった。体裁のよい「人生の選択」という行為も、‘identity’という観念のどちらを優先させたとしても、そこには、空疎な、魂を自殺させた尼僧の姿があるのも、彼女自身は手を染めなかった、アレンの自殺については自らは潔白であったという彼女の意識の在り方が問題なのである。シスターが、アレンの苦悩や死に対して平静でいられたことは、彼女の信仰の強さの証しではなく、彼女が自分の内面の問題を人生の選択という問題にすり替えたところに、彼女の意識下に精神の死があったということなのである。アレンの凍死は事実であるが、シスターの観念の凍結は現実的な問題として残されたまま物語が終わるのである。

コニーに関しては、彼女がアーノルドに屈服するのは、現実的には、アーノルドの犯罪的ともいえる脅迫がコニーの精神を壊滅させていくのであるが、コニーがアーノルドの巧みな誘導の仕掛けに陥ちていく過程と彼女の無防備さが対照的である。素足の感覚が捉える硬質のリノリウムタイルの冷たさが彼女が家を出る前の最後の感覚であるのだが、彼女の素足の感触が、

さらに、無力感を伝えているのである。今まで、馴染んでいるはずのすべての情景を未知の感覚で捉え、彼女の前方の空間の広漠さは、醜悪で、残忍な脅迫者に対するコニーの動きや叫びよりも、恐怖の感覚の広がり強く伝えてくれる。

Something roared in her ear, a tiny roaring, and she was so sick with fear that she could do nothing but listen to it—the telephone was clammy and very heavy and her fingers groped down to the dial but were too weak to touch it. She began to scream into the phone, into the roaring. She cried out, she cried for her mother, she felt her breath start jerking back and forth in her lungs as if it were something Arnold Friend was stabbing her with again and again with no tenderness. A noisy sorrowful wailing rose all about her and she was locked inside it the way she was locked inside this house.⁴⁸⁾

コニーは、アーノルドに言われるままに、受話器を置き、ゆっくりと立ち上がり、彼の方へ歩いていくのであるが、彼女の意志を麻痺させて、コニーの精神の死を暗示していくこの場面は、コニーが自ら弄んだ現実と非現実を交錯させた夢の遊びが稚拙過ぎたにしては、大きな犠牲を払わされたことを意味しているのである。

オーツの主人公たちの運命の問題については、次の引用が示唆的である。“The paradox in much of Oates’s fiction is that her characters push to transcend their circumstances, but it is their fate to discover that they are imprisoned in a dream polluted by the real circumstances of American life. Although the individual’s dreams take the forms shaped by the ideals of his culture, the extent to which they are realizable is circumscribed by the realities of that culture”⁴⁹⁾ ここで、フリードマンの言うように、オーツの作品の結末が人物たちの運命を変えていく行方に、逆説として、彼女たちに他の選択の可能性を暗示していることである。聖と世俗の狭間や自ら抱く幻想の矛盾に陥るオーツの人物たちの中から、カトリックの尼僧に対するユダヤ系の青年の関係、60年代の若者文化の教祖で、流行のロック歌手ボブ・ディランのスタイルを真似た、得体的のしれない青年と夢見心地の十代の少女という取り合わせは、60年代にアメリカを震撼とさせた、アメリカ文化の聖と俗の影を見つめた作品であるといえよう。

おわりに

以上、オーツの描く人物たちが、それぞれの内的世界と外界の現実との接点において如何に対応しようとしたかを検討してきた。彼女たちが現実と考えていた世界についての誤った認識が、予期せぬ結末に至る過程を追及してきた結果、そこから、意味を見い出すとすれば、シ

スター・アイリーンの場合には、彼女が、人生の選択と捉えた結論は、心を閉ざした生き方であったということが理解されてくるのである。彼女の全人生はキリスト教の秘跡を経験した者として、祈りと規則、義務という日常性の連続であったはずなのであるが、異端の青年に思いを寄せたシスターの動揺は、矛盾との対立であった。相容れない束縛からの逃亡は、シスターにさらに深い孤独の生き方を選択させることになったのである。感情を育むことに失敗したシスターの生き方は自らの過誤を認めず、聖職者の生き方に身を沈めるという現実逃避に帰結したのであった。教会と信者の契約の背後に隠された一つの人生を、社会の現実の側から捉えたオーツがアメリカ社会の孤独な魂をキリスト教会の内部に追及したことは、逆説的に、精神的救済の必要性を問いかけている物語となっているのである。さらに、オーツは、精神が枯渇し、人間関係が物質的尺度で計られる‘marketplace’のイメージをコニーとアーノルドの関係に追及したが、コニーという少女については、自己中心的な夢が観察されるのみで、ひたすら恋愛に向かう彼女の若いエネルギーが、その遊戯の夢にとらわれ、夢に傷つけられるということにも逆説的問いかけがある。ロマンスを商品化させてしまった時代の若者をオーツが描くのは、ジョンソンが、“the distinct ways in which her work focuses upon the intense conflict between the individual and his social environment.”⁵⁰⁾と述べているように、社会と人間関係を十分に考慮して、対立と矛盾という困難な問題の中で出口を見い出せないでいる疎外された人物を描くことによって、未来へ向かう可能性を逆説的に暗示しているといえよう。オーツがシスターの中にキリストの愛が見失われていると捉えるのも、コニーのような現代の若者の風俗を凝視するのも、彼女たちの人生の背後には不毛な精神風土を生み出した時代があることを睨んでいるオーツの視線が意識させられるのである。

オーツが暴力や狂気を取り上げるのは、人間の激しく暴力的な面、不気味な非常さの一面も人間の内面に存在することを認めているからに他ならないのである。人間を理解するという困難な仕事について、人物たちが苦渋に満ちた経験を強いられたり、破滅に追い込まれたりする過程をも徹底して追及することが必要であるという考えのオーツを評して、A. ケイジーンは、次のように述べている。“Since her prime concern is to see people in the terms they present to themselves, she is able to present consciousness as a person, a crazily unaccountable thing. The human mind, as she says in the title of a recent novel, is simply ‘wonderland.’ And the significance of that is America today is that they collide but do not connect.”⁵¹⁾と、オーツが描こうとしている人間の「神秘性」には、暴力、殺人、背信といったおぞましい面も含まれていることを強調している引用であるが、人物の異常性を描くのも、それに対する心理的反応、悲劇的結末も人間の姿として捉えるべきであるという主張が伝わってくるのである。

最後に、“Most interesting of all, perhaps, is Oates’ treatment of the fear of being the Outsider. No matter what else the story is about, nearly every one touches on this particular terror.

Outsider is a person who perceives himself as somehow cut off from, shut out of, the human race. He suffers from being uncontrollably different, an aberration.”⁵²⁾ と述べる C. ウォーカーの見解に注目すると、主人公たちの経験する恐怖の解析のためには、外界からの闇入者の屈折した心理と対峙しなければならないフェミニストの視点が伺われる。シスターの恐怖は、“an individual’s fear of emotional pain if she involves herself too deeply with another person”⁵³⁾ と他人に心を奪われることを危険視する心理であり、コニーの場合は、‘a helpless woman’s fear of male sexual aggression’⁵⁴⁾ というように、男性優位の観念に潜む性差の歪みを捉えた解釈をしているのである。オーツが追及した、人物たちの自我の行方の二つの型には、彼女たちの空虚で不毛な精神構造が必然的に招いた魂の凍結と崩壊という結末に至ることを見てきたのであるが、激しい暴力や狂気の力を借りなくては見えてこない人物たちの心理の深奥の問題を描出したところに、オーツの成熟したフェミニズム観に基いたこれらの作品を評価したいと思うのである。

注

- 1) Kazin, Alfred. “Cassandras—Porter to Oates (*Bright Book of Life: American Novelists & Storytellers From Hemingway To Mailer, An Atlantic Monthly press Book, Little, Brown and Company—Boston—Toronto, 1973*), pp.198–199.
- 2) Johnson, Greg, *Understanding Joyce Carol Oates* (University of South Carolina Press, 1989), p. 95.
- 3) Friedman, Ellen. *Joyce Carol Oates* (Frederick Ungar Publishing Co., New York, 1980), P.3.
- 4) 中村一夫他註解。In *The Region Of Ice* (THREE STORIES OF YOUNG AMERICA, Seibido, 1981), p.1.
- 5) Ibid., p.1.
- 6) Ibid., p.2.
- 7) 生駒幸運他註釈。Where Are You Going, Where Have You Been? (CONTEMPORARY AMERICAN WOMEN WRITERS, Nan’un-do, 1977), p.14.
- 8) In *The Region Of Ice*, p.13.
- 9) *Where Are You Going, ...?*, p.17.
- 10) Ibid., pp.17–18.
- 11) In *The Region Of Ice*, p.1.
- 12) *Where Are You Going*, p.15.
- 13) Ibid., p.14.
- 14) In *The Region Of Ice*, p.6.
- 15) Ibid., p.7.
- 16) Ibid., p.7.
- 17) Ibid., p.8.
- 18) Ibid., p.8.
- 19) Ibid., p.9.
- 20) Ibid., p.9.
- 21) Ibid., p.8.
- 22) Ibid., p.8.
- 23) Ibid., p.9.

- 24) Ibid., p. 11.
- 25) Ibid., p. 11.
- 26) Ibid., p. 7.
- 27) Ibid., p. 12.
- 28) *Where Are You Going ...?*, p.20
- 29) Ibid., p. 22.
- 30) Ibid., p. 23.
- 31) Ibid., p. 23.
- 32) Ibid., p. 23.
- 33) Ibid., p. 28.
- 34) Ibid., p. 29.
- 35) Ibid., pp. 29–30.
- 36) Ibid., p. 30.
- 37) Ibid., pp. 30–31.
- 38) Ibid., p. 33.
- 39) Oates, Joyce Carol. *THE PROFANE ART; Essays & Reviews* (Persea Books, New York, 1983), p. 10.
- 40) *In The Region Of Ice*, p. 13.
- 41) Ibid., pp. 13–14.
- 42) Ibid., pp. 14–15.
- 43) Ibid., p. 16.
- 44) *In The Region of Ice*, p. 14.
- 45) Ibid., p. 14.
- 46) Ibid., p. 14.
- 47) Ibid., p. 29.
- 48) *Where Are You Going, ...?*, p. 38.
- 49) *Joyce Carol Oates*, p. 12.
- 50) *Understanding Joyce Carol Oates*, p. 12.
- 51) *Bright Book Of Life*, p. 200.
- 52) Walker, Carolyn, “Fear, Love, and Art in Oates’ ‘Plot’” (*CRITIQUE*, 15, 1973), p. 59.
- 53) Ibid., p. 59.
- 54) Ibid., p. 59.

(かわせ ひろこ 本学人文学部教授 アメリカ文学専攻)